

常夜燈（1）

西羽 晃

桑名の七里の渡し場跡にある常夜燈について前回に触れましたが、もう少し詳しく書きます。

後で述べますが、この常夜燈は天保4（1833）年に建てられたものです。移転したり、戦火や風水害を受けて風化していますが、建立当時に資金を提供した人および団体の名前が刻まれているのが今も見えます。その数は243件（『歴史の道調査報告書VI』1987年、三重県教育委員会編）です。中には江戸・名古屋の人も含まれています。当時の桑名の町人個人や町内まとめた名前もあります。川口町内、片町北之組、船馬町16組、江戸町々内、下本町々内、寺町長屋中、某組合、伊藤長左衛門組合などで、零細な人々が資金を出しあつたらしく、多くの人びとの協力で建設されたことが判ります。

当時の町人の殆どは苗字を持たず、屋号を名乗っていましたので、屋号で書かれている方が多いですが、中には苗字で書かれている方もあります。苗字を許される町人は有力な町人です。佐藤孫右衛門、広瀬武助、平野助左衛門、山口三十郎、山口新九郎、下里勘左衛門、中嶋孫左衛門、米田八兵衛、中嶋庄右衛門、川瀬覚左衛門、大塚与六郎、大塚松兵衛、荒川弥太郎などの名前が見られますし、近郷の富農である稲垣専八、藤谷伝左衛門なども見られます。

この常夜燈は元は東海道筋の七ツ屋（鍛冶町）にあったのが、戦後に交通の邪魔になるので、七里の渡し場跡に移転されたと言われるます。しかしそれ以前には「^{もと}原船馬町東詰南ノ方、町留ニ設立セシ、伊勢皇大神宮ヘノ奉燈也、□□年中事故アリテ此地（七ツ屋）ヘ移シタルナリ」（明治20＝1887年ころの桑名の様子を書いた「桑名名所図絵後編」）。この記述を裏付ける資料を私は見ていませんが、真実だとすれば、元々あった場所に戻ったこととなります。

戦後に七里の渡し場跡に移転された後に、昭和37（1962）年の台風

で上部が倒壊してしまいました。そのため多度神社にあった常夜燈から寸法のあう大きさの上部を持って来て付け替えられました。壊れたのは「天保4年」の銘でしたが、付け替えられたのは「安政3（1856）年」の銘です。これが現在も建っています。よく見ると上部と下部の色がくっきりと違っており、明らかに違うことが判りますし、段数も一段増えています。



七里の渡し場跡にある常夜燈
(1956年ころ)



(2020年)